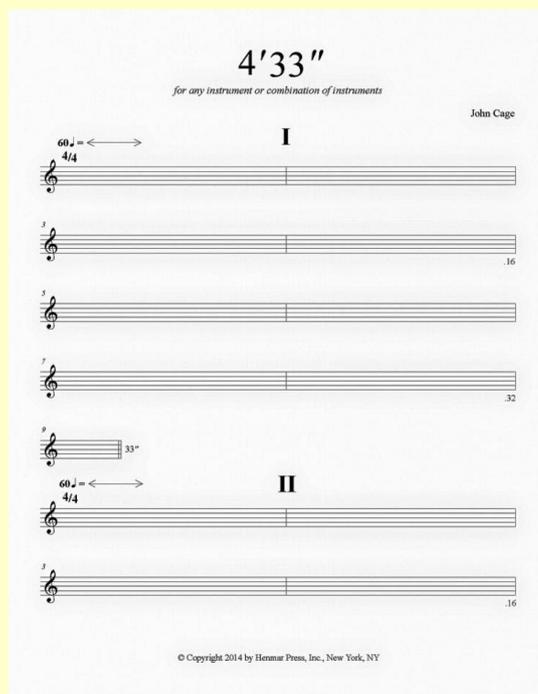


音楽は 楽譜か？ 演奏か？

2022/03/21



芸術作品の始まり

わたくしごとで恐縮ですが、大学院の入学試験を受けるときに、「芸術作品と芸術家の関係について書け」という問題が出たのを、いま、思い出しています。ハイデガーの『芸術作品の始まり』（1950）という論文を読んでいたのも、出題者の意向を余り外さずに書いてあった — とあとで担当教官から聞きました。ハイデガーは、「芸術作品と芸術家の間には芸術と言うものがある、芸術がこの両者に関係付けている」と言っているのです。何だか当たり前のようですが、この考え方はとても貴重なものに思われます。なぜ貴重かと言えば、例えば次のような窮地に立ったときに慌てなくても良いからです。

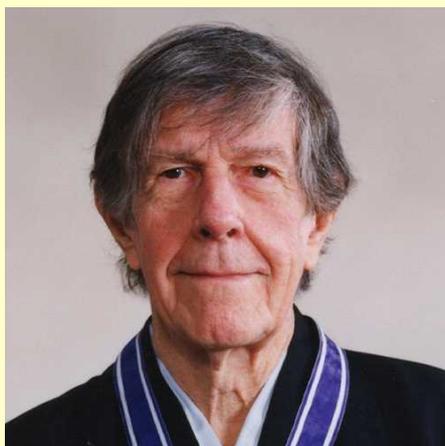
音楽美学上のパラドックス

めでたく大学院に入ったのはいいのですが、日本美術を専門にしている先輩に、「音楽美学の研究対象は何だ？」と尋ねられたことがあります。これは大変怖い質問です。なぜ怖いかと言えば、ここには音楽美学上のパラドックスが隠されているからです。もし、「音楽美学の対象は、楽譜です」と答えれば、「音楽は紙切れか」とバカにされます。「演奏です」と答えれば、「ベート

ーヴェンが書いた唯一の楽譜を対象にしないで、数限りなくある演奏でもってベートーヴェンを論じることができるのか」と突っ込まれます。「楽譜と演奏の両方です」などと答えようものなら、「学的対象が二つもある学問なんてあるものか」といわれるに決まっています。その点、美術は楽です。「絵だ」と言えばいいのですから。

楽譜か演奏か

また、音楽学会全国大会のシンポジウムのことでした。「音楽作品とは何か」というテーマで分科会が開かれたことがありました。「なんて詰まらないテーマだろう」といってまともに論じない分科会もありましたし、「楽譜か、演奏か」で真面目にもめた分科会もありました。現象学的還元を学問的な信条とするものには、これは、古くて新しい問題だと言えましょう。私の先生の渡辺護が指名されてこの難問に答えることになりました。当然のことですが、渡辺先生は、「音楽作品は楽譜です」とお答えになりました。なぜなら、バッハとベートーヴェンの音楽の違いを説明するのに、二人の楽譜に寄らずになにに寄るのでしょうか。でも、この「楽譜か、演奏か」のパラドックスを抱え、もっとダイナミックな答えを要求する壇上のパネリストたちとフロアーの学会員たちは、このオーソドックスな考え方に異論を唱えました。時代はそのときすでに、「講壇美学」にはもう満足しなくなっていたのです。



John Cage 1912- 1992

偶然性の音楽

この「楽譜か。演奏か」の問題を作曲家の側から解いたのは、アメリカの現代作曲家ジョン・ケージ(John Cage, 1912-1992)です。彼に、『4分33秒』(1952)という作品があります。舞台の中央にピアノを置いて、正規のステージ衣装を着けたピアニストが出てきます。聴衆に挨拶をしてピアノの前に座ります。3回だけピアノの蓋を上げ下げして、あとはなにもしないで、4分33秒経ったらまた静かにお辞儀をして戻っていくのです。これで、この曲はお終い。3回ピアノの蓋を上げ下げするのは、この曲が3楽章から出来ているからです。聴衆が騒ごうが、怒ろうがこの曲はこれでお終いです。

音の総体

実は、この作品は、「4分 33 秒の間にコンサート会場で聞こえてきた音の総体」なのです。すなわち、ピアニストがピアノの前に座ってから、聴衆の耳に聞こえてくる音すべてが「音楽」であり「作品」だということです。いつまで経ってもピアニストがピアノを弾くどころか、まったく身動きもしません。なにもしないので、たまりかねた聴衆がゴソゴソと身動きをします。隣の人とヒソヒソとささやき始めます。ホールの外からは救急車のピーポーという音が聞こえてきます。教会の鐘のキンコンという音も聞こえてきます。怒って帰っていく人のドタバタした足音とドアをパタンと閉める大きな音も聞こえてきます。ささやき声が次第に大きくなって、ガヤガヤという話し声がホールに満ちます。4分 33 秒の間に聞こえたゴソゴソ・ヒソヒソ・ピーポー・キンコン・ドタバタ・パタン・ガヤガヤと言った音が音楽なのです。ケージはこれを、「偶然性の音楽」(aleatoric music)といました。このような音楽作品がある以上、学的対象は「楽譜か、演奏か」という論議は無用に思われます。

楽譜もある

因みに、この『4分 33 秒』の楽譜を買ってみてみましたら、1枚の頁に第1楽章、第2楽章、第3楽章と書かれていて、それぞれにト音記号と全休止符と終止を現わす重線がついた5線譜があるだけでした。なぜ、「4分 33 秒」なのか良く分かりません。ケージ自身は、「この数字は易によって決めた」と言っています。これを秒に換算すると 273 秒となるので、すべての分子が静止する「絶対零度」(摂氏-273 度)と関連づけることも可能です。どちらも、特に意味はないと思われます。

重要な聴衆の存在

ここでもう一度、「楽譜」と「演奏」について考えてみましょう。「楽譜」は、作曲家が書きました。「演奏」は作曲家が書いた楽譜を見て、演奏家がそれを演奏します。では、「作曲家」と「演奏家」の間にはなにがあるのでしょうか。先ほどのハイデガーの言葉から、「そこには音楽がある」と答えればいいのです。そうです、ここには音楽があるのです。でも、音楽が音楽として成立するには、もう一人、重要な人物がいます。それはだれでしょうか？ そうです。ここで初めて登場するのは、私たちが忘れていたもう一人の重要な人物、「聴衆」です。演奏家が演奏した演奏を聴衆が聴くのです。



システムとしての音楽

目にも見えず、耳にも聞こえない

では、「作曲家」と「演奏家」と「聴衆」の間にはなにがあるのでしょうか？ そうです。ここでもこの三者を結びつけているのは、「音楽」です。そうすると、音楽が音楽として成立するのは、音楽を楽譜化する作曲家がいて、楽

譜を演奏する演奏家がいる、さらに演奏を享受する聴衆がいるときだ — ということになります。もう一つ言えば、「演奏」に感動した聴衆は、さらに作曲家に「音楽」を求めるでしょう。作曲家は、そんな聴衆の求めに応じて新しい作品を作曲することになります。ついに、この三者の間を「音楽」が、グルグル回り始めるのです。ここにおいて、「音楽作品」はもう楽譜でもなく、演奏でもありません。三者の間をグルグルまわる、目にも見えず、耳にも聞こえない、「音楽」としか言いようのないものです。

システムとしての音楽作品

従って、「音楽作品」とは何かと訊かれれば、「音が、作曲家と演奏家と聴衆の回りをグルグル回るように組み立てられた体系そのもの」といえばいいのです。音楽美学は、楽譜でも演奏でもなく、この生きて動くシステム全体を「音楽作品」と考えて、この機構そのものを研究対象とすればいいのです。そして、この音楽作品というシステムの中を回っている音こそ、ハイデガーのいう「芸術」であり、音楽美学でいう「音楽作品の音楽性」です。実際の品物の代わりに貨幣が市場を巡って経済活動が行われるように、楽譜の代わりに「音楽作品の音楽性」が作曲家と演奏家と聴衆の心を巡って音楽活動が行われるのです。音楽家は決して、孤独ではあり得ないのです。

手仕事

むろん、この三つの役割がはっきりとそれぞれ分かれていなければならないことはありません。作曲家の自作自演の演奏会もあります。演奏家が即興的に曲を弾くときもあります。お客がだれもいなくても、家族だけでサロン演奏会を開くときもあります。私のように、一人でこっそり音楽を楽しむ人もいていいでしょう。



決して上手くはありませんが、私はヴァイオリンを奏くのがとても好きです。両手を素速く動かして、速いパッセージをスルスル奏くときの快感はなにもものにも代え難いものがあります。それはまさに、「頭が肉体を見事に支配するのを実感できた」という喜びです。次から次へと右手の「ボウイング」（弓使い）と左手の「フィンガリング」（指使い）を一瞬のうちに一致させながら、木の箱から美しい音を導き出していくときこそ、頭と手が、すなわち、知性と感性が一致した感動の瞬間です。これは「手仕事」の価値を知る瞬間でもあります。

小さな円環作用

日常の「生活世界」に生きる自らの肉体を使って、生活世界を超越した美を直接造り出しながら、それを実感することに手仕事の重要な意味があります。精神が肉体を支配し、支配された肉体が精神を満足させる美を生み出す「手仕事」 — この精神と肉体をつなぐ「小さな円環作用」である手仕事こそ、音楽美学の実践でなくてなんでしょうか。私が、美学を学ぶみなさんに、なにか一つ楽器をおはじめになることをお勧めする由縁です。

都築正道